

行事に学ぶ

上 廣 榮 治

七夕^{たなばた}、各地の夏祭り、お盆……夏のこの時期はまことに行事^{ぎょうじ}の多い季節です。しかし、戦後しばらくの間、こうした行事^{ぎょうじ}の類^{たぐい}は、非科学的だとか封建遺制^{ほうけんいせい}などと手ひどく攻撃され、ずいぶんと衰えてしまったことがあります。たしかに、これらの行事は科学的ではありませんし、民主主義以前の遠い昔から伝えられてきたものです。しかし、それにもかかわらず、さまざまな行事が、いままた復活し盛んに行なわれるようになったのはなぜでしょう。それらの行事には、どこか人々の心をうつものがあるのではないか、私にはそう思われるのです。

では、夏祭りなどの伝統的行事はなぜ人の心をとらえるのでしょうか。連綿^{れんめん}として継承^{けいしょう}されてきたものには、それだけの意味があるはずで、私は、祭りとは「天」を知る場である、と思うのです。

この世には人知^{じんち}を超えた存在がある。私たちが今日のような形で生かしているもの、人間としての生

き方を律する大いなるものがある。それが「天」です。わが会でいうところの大自然の摂理（理法）にあたるものです。

お祭りに際して高く掲げられる幟や旗、神樹の梢に掲げられる飾り、山車の屋根に聳える鉾や柱、いずれも天から神を招き降ろすための目印です。こうして神を迎えて行なわれる祭りに参加することで私たちは、人間を超える存在、小賢しい知恵や理屈を超えた永遠なるものを敬ってきた先祖たちの心に触れることができるのです。そして、古人と同じように、素直な心に立ち返り、人間よ奢るなかれ、人よ謙虚であれ、という感慨を持つのであります。

しかし、こうした伝統行事に冷やかな人々、無関心な人々も少なくありません。天だ神だということが「非科学的だ」「愚かな迷信だ」というのでしようが、彼らが奉じる「科学」だとして、この世の万象のすべてを説明しきることなど到底不可能です。科学を奉じることでも人が幸福になったわけでもありません。科学の発達のお蔭とは、暮らしが多少便利になった程度のことでしょう。むしろ、それを盲目的に信じた結果が、人類や地球自体の滅亡まで予想させるほどの大不幸を生み出してしまったともいえましよう。科学的でないことを以て敬天を非難することは、文字通り「天に唾する」愚行だと言わざるを得ないのであります。

ところで、先頃、埼玉県の高校で、入学式という伝統的な学校行事をめぐる騒動がありました。学校側の対応が適切なものであったとは決して思いませんが、入学式を否定する人たちの側にも、天を非科学的だと批判する人たちと共通するある種の傾向がありはしないかと少し気にかかりました。

彼らはともに、「より大きなもの、個人を超えたものに対する謙虚さ」を嫌うのではないか。常に自分の側、個人の側を善しとし、すべてのものの上位におきたがるようにみえるのです。天と人間という

ことであれば人間の側、学校と生徒であれば生徒の側、全体と個人であれば個人の側を支持し、つまるところ、自分がまず第一だという考え方になってしまおうのではないかと思うのです。

しかしながら、こうした自分本位の考え方は、自分を磨くためには随分と損な考え方だと私は思うのです。他から学び、自分を向上させることを初めから拒否してしまおうからです。

少なくとも、実践倫理の考え方は違います。わが会は個人の自己変革を通じて、より多くの人の幸福を、社会全体の幸福を目指します。つまり、自分たちはまだまだ未完成な、これから善き方向へ伸びていく「素材」であると認めています。私たちは未熟ですから、自分以外のすべての事象じしやうを否定しようとはいたしません。私たちは、自分以外のあらゆる事象に学び、自分を善なる方向へ高めるべく努力し続けるのです。その意味で「万象わが師」であるのです。この世の森羅万象しんらが師であるなら、すべてを否定することなく、まず受け入れる。それが実践倫理の「現実大肯定」の態度です。

私たちは、自分以外のすべての事象に謙虚に接することで、実に多くのことを学びます。何事に対しても、どちらが優位であるとか、正しいとか悪であるとかを、即断することはいたしません。謙虚な心で万象に接し、接するところのすべてから、倫理的な生き方を学びとり、一人一人が学んだところを生活のなかで実践していくのです。

当然、当たり前のように続けられている行事にも、学ぶべきところを求めよういたします。祭りに敬天の心を学ぶように、もし、その行事に人を善き方へ導こうとする意志、万人の幸福を祈る心がこめられているとすれば、私たちはそれに気づき、いかに生きるべきかの指針を学び取ろうとしましょう。そして、より意義深い行事にすべく努力するはずです。

どんなに形骸化けいがいしてみえる行事にも、それなりに学ぶべき意義がある。およそ自然の摂理によって生せい

起する、ありとあらゆる事象には、すべて学ぶべき何事かがある。素直で謙虚な気づきの精神を以てすれば、私たちの周囲には、人生の指針が満ち満ちているといつてよいでしょう。

しかしながら反対に、もし私たちが、素直で真摯な学びの精神に欠けているとするならば、いかに有意義な行事であつても、そこから何も学ぶことはできないでしょう。その結果、惰性に流れた行事は形骸化していきます。当たり前のように続けられている行事も、常にその精神が問われなければ、生命力を失い滅びていくだけなのです。かの入学式問題は、そうしたことを私たちに教えてくれました。

わが会の行事だとして同じことです。その行事の意義について常に確認し、積極的に実践に活かしているという気構えがなければ、そこから学ぶべき何事も発見できはしないでしょう。

では、あなたにとっての朝起会は、自己変革の場であり続けているでしょうか。全国八百余箇所における会場のなかに、形骸化の兆候はいささかもみられないといえるではありませんでしょうか。

最近、演談の題材の半ばが、会の活動や行事の報告になってきている会場が多いといわれます。活動や行事が最終目的になってしまっていて、朝起会の「心」が稀薄になっていたりはいらないでしょうか。会場には、学んだところを実践する喜びの声と共感が満ち満ちているのでしょうか。

決まり事だから、上から言われたことだから、伝統的な行事だから。そんな惰性に流されてはいないでしょうか。

人間は、その根幹に磨けば光る善なる素質を確かに持っています。しかし、同時に人間とは、怠惰を好み安逸に墮して、せっかくの資質を曇らせやすいものでもあります。だからこそ、善を磨くべく努力実践し、より高度の学びを得る場が必要となってくる。朝起会という行事の意義もそこにあります。

さて、会友諸賢は、日々の朝起会で何に気づき、何を学んでいらつしやいますか。